

特集

女性伝統工芸士の 美の世界

日本の伝統工芸は、世界でも屈指の高度な技術を誇っている。

それゆえ、伝統的技術の習得には長い年月が必要となる。

また、生活様式の変化に伴い、伝統的工芸品の需要は低迷し、後継者の確保・育成も難しくなっている。

この課題に対処するために1974(昭和49)年に生まれたのが「伝統的工芸品産業振興法」であり、

この法律をもとに国から贈られる称号が「伝統工芸士」である。

現在、経済産業大臣が指定する「伝統的工芸品」は全国に207品目、

認定登録されている伝統工芸士は4,592人にのぼり、そのうち女性伝統工芸士は520人。

生活の洋風化が進んでいる現在、暮らしにゆとりを与える伝統工芸をつくる女性にスポットを当て、

その技術を紹介しながら、伝統的工芸品の魅力をさぐる。

漆黒の生地をキャンバスに
色漆で描く。山中漆器の薬。

はるか縄文時代の昔から使われている塗料で、「美^{うるわ}し」や「潤^{うるし}液」が語源ともいわれる漆。そして、漆器は英語で「japan」。まさに日本を代表する工芸品である。石川県加賀市で400年以上の歴史を持つ山中漆器に加飾を施す蒔絵師・大下香苑さんは、10年ほど前に伝統工芸士になった。

蒔絵との出会いは、山中漆器の蒔絵師である義父・大下香仙^{こうせん}氏から贈られた、ひとつの棗^{なつめ}(茶器の一種)。秋草が描かれた真っ赤なその棗を手にした瞬間、香苑さんは強い衝撃を受けた。「しっとりとして艶があって、まるで吸いつくよう。艶やかで、世の中にこんなに綺麗なものがあつたなんて……」。まるで今この瞬間に棗を手渡されたかのように、目をキラキラさせて思い出を語る。そのとき「いつか私もこんな綺麗なものを作りたい」と思ったそうだが、その感動や愛おしむ気持ちをいまでも純粋に持ち続けているに違いない。

出身は北海道。木々の鮮やかな新緑や紅葉。そして辺り一面を覆い尽くす真っ白な雪。そんな四季折々の自然の色をキャンパスに写すのが大好きな少



大下家で以前使われていた型紙。今は文様の本が数多く出ているが、昔はこのような型紙を元にして制作していた。

女だった。画家になることを夢見て中学卒業と同時にひとり上京。高校を卒業し、絵の勉強とアルバイトに明け暮れていた20歳過ぎのころ、デザイン学校を卒業して間もないご主人・大下宗香^{むねかほ}氏と出会う。宗香氏は香仙氏の三男だ。ともに美術を愛する2人は結婚し、やがて山中に居を構え、宗香氏が4代目を継いだ。

香苑さんといえば、画家になる夢を蒔絵の世界で実現させたいと思っていたものの、山中漆器で女性蒔絵師の前例はなく、仕事は義父や夫の下仕事ばかり。ひたすらチャンスを待った。そして、棗を贈られてから約10年後、子育てにも少しゆとりができたころ、ようやく義父から指導を受けることが許された。そのときから、絵描きになりたいという少女時代からの一途な夢に向かって、あらん限りの情熱を燃やした。

大切なのは物を育てる心

伝統工芸士の役割について尋ねると「伝統を踏まえたくらうで、今の人が見えるものを作ること。ただ伝統を守っているだけでは意味がないと思います」ときっぱり。そんな香苑さんが作るものは、棗などの茶道具やお椀、万年筆、アクセサリ、帯留と実に多彩。図案は、以前は代々受け継がれてきた型紙を使っていたが、今は文様の書物をひもといて使うことが多く、ときには自分が庭で摘んだ草花をモチーフにすることも。また、宗香氏に師事

する次女・亜紀子さんのデザインを取り入れることも少なくない。

香苑さんは顔料を調合しながら絵を描いて金を蒔いていく“色漆”を多く手掛ける。これも「いまの方々に喜んで使ってもらえるものを」と、使う人の身になっての選択でもある。ときには「さまざまな塗りや蒔絵の技法をいったん壊して制作することもある」という。それほど思い切った挑戦ができたのも、山中漆器の技と心をしっかりと刻み込んでいるからに違いない。

制作に際して香苑さんが頑固なまでに守っているのが材料。いい木、いい漆を使わないと、持ちや艶が全然違う

という。漆器作りは分業なので、木地師や塗師は昔から信頼のおける職人に依頼している。ただし、最近はその職人が減ったり、蒔絵に使う金が昔の2倍近くに値上がりするなど、厳しい現実もあるようだ。そして、塗師から届いた漆器に香苑さんが美しい蒔絵で加飾を施し、仕上げる。しかし、本当の仕上がりは、実はそれを使う者の楽しみでもある。漆器は使うほどに艶が出たり、木目が浮かび上がったりと美しさを増していくからだ。

そんな話のなか、香苑さんは「別に物が大事というわけではないの」と、物作りに携わる人らしからぬ言葉。理由



香苑さんが「漆や蒔絵を身近に感じてほしい」と考案した万年筆やペン。昆虫や動物の図柄がかわいし

を聞いて、なるほどと納得させられた。「大切なのは物を大事に思う心。いい物を使うことは豊かな心を育てることにつながると思います」。何かと使い捨ての現代、物を大事に思う気持ちは確かに希薄になってきている。しかし漆器は、ひびが入っても多少欠けても修理が利く。美しいだけでなく、実は非常に合理的なのだ。

ところで、女性の伝統工芸士ならではのメリットは何かあるのだろうか? 「お客様の声を聞きやすいこと。例えば、お椀は基本的に汁物を入れるものだけど『もう少し大きかったら混ぜご飯や炊き物に入れられるのに』というお客様の話を聞いて、少し大きなサイズも作ったこともありますよ」とのこと。使う人の生の声はできるだけ聞くようにしているそうだ。そして、黒と赤のお椀のどちらを購入しようかと迷っているお客がいれば「お澄ましなら黒、お味噌汁なら赤が映えます」と、ちょっとしたアドバイスも。

道具は日常使えてこそ美しい。まさに「用の美」の「japan」だ。

用と美を兼ね備えた色艶やかな山中漆器



大下香苑 おおした こうえん

1947(昭和22)年北海道生まれ。1969年に蒔絵師の大下宗香氏と結婚。1978年から義父・大下香仙氏に蒔絵を師事。長女は版画家、次女と長女の婿が宗香氏に師事している。



これまでに手掛けた棗の数々。いい漆は、使うほどに艶が出るという。



蒔絵を描く時に使う筆ややすり。用途に合わせて硬さや太さもさまざま。



漆に顔料を入れた色漆を使い、高蒔絵という技法で加飾していく。



「物を作る人は想像力と夢を持っている。頭の中で80~90%作り上げて、あとは手を動かすだけ」と香苑さん。蒔絵を施すことを「絵を描いて遊ぶ」と表現する。仕事を楽しんでいる様子が伝わってくる。



山中漆器を守り立てる大下さん一家。作業場は話し声や笑いが絶えない和やかな雰囲気。右手前が香苑さんと、反時計回りにご主人・宗香さん、次女の亜紀子さん、長女の夫・正之さん。

漆芸大下香仙工房
加賀市二子塚町103-2 電話0761(77)5250
<http://www.koukoubou.com/>

カチッカチツ、トントン、トントン、カチッカチツ、トントン……。糸が巻かれた木の組み玉がぶつかり合う音と、組んだひもを竹のヘラで整える音が、なんとも心地よい。高台と呼ばれる台に正座し、一定のリズムで帯締めを組み上げていくのは、梶 操さん。左右にびんと張られた計68玉ものひもを自在に操るその手は、大きくて張りがあったつやつやしている。

この道五十余年で、伝統工芸士になったのは30年前。「好きやからねえ。私はつくづく、くみひもに合うてんやね。これからもこうして続けていけたらええなあ思ってますけど」。梶さんの穏やかな京都弁は、組み玉が重なり合う優しい音と実によくマッチしている。くみひもの歴史は古い。平安時代には装束をはじめ調度品に、戦国時代には武具や馬具の装飾として用いられた。さらに経巻や数珠、茶道具のひもなど、時代や用途によってさまざまに使われてきた。帯締めにされるようになったのは意外と新しく、明治になってからだそうだ。現在、くみひもでは、京くみひもと伊賀くみひもの2つが伝統的



さまざまに組まれたひも。色の組み合わせや柄でデザインは無限に広がる。

工芸品に指定されている。

操さんはこの世界に入る前、地元・宇治の小学校に代用教員として6年間勤めていた。「子どもは家の宝。それをずっと頭に入れて教育していました」と、目を細めながらかわいい子どもたちの思い出話を語ってくれた。そんな教員時代に、同僚だったご主人・梶昇氏と出会う。昇氏は、伊賀でくみひも店を営む親戚に勤められ、1949(昭和24)年にくみひも店を創業していた。操さんがくみひもの世界に入ったのは、その昇氏と結婚した1952年である。

色の基本は木・火・土・金・水

結婚と同時に操さんは教師を辞め、夫・昇氏の仕事を守り立てた。技術は師匠である義母の組み方をひたすら見て覚えたそうだが、とくに苦労したのが柄ものを組む時に必要な「綾書き」の制作。この綾書きは、組み子にとっては欠かせない指示書だが、初めて見る者にとってはまるで暗号のようである。当時これを書ける職人は少なかったが、操さんはなんと独学でマスターした。

「綾書きがなくては自分とこのオリジナル商品が作れませんからね。私も店を続けていくために必死で研究しました」と振り返る。そして、ご主人が

描く新しい帯締めのデザインを操さんが綾書きに起こし、職人たちが組み上げていった。綾書きを書くのは、実際にひもを組むよりもはるかに時間がかかる作業なのだそうだ。

ところで、組み方はもちろん、ひもの配色次第で無数のデザインが生まれるくみひも。「昇苑くみひも」では、まず生糸を購入し、西陣にあるなじみの染め屋さんで色を指定し染めてもらっている。それにしても帯締めをはじめコースターやストラップなど、個性的な色同士の組み合わせでもしっくりバランスが取れている。配色に決まり事などあるのだろうか。

「母は意識していないかもしれませ



生糸を染めるための色見本。この見本をつけて西陣の染め屋で染めてもらう。

んが、基本になっている5色があるんですよ」と教えてくれたのは、亡くなった昇氏の跡を継いで仕事を切り盛りする次男の方さん。自身も伝統工芸士の資格を持つ。母・操さんの作品には、平安朝の昔から使われている基本色が入っていることに、最近気づいたそうだ。それは、厄除けの色である木(青または緑)・火(赤)・土(黄)・金(白またはベージュ)・水(黒または紫)。中国に古代から伝わる「五行説」で、世界を構成する5つの元素を象徴する色でもある。一見どれも主張する色だが、

いくつか組み合わせられると不思議となじむ。ちなみに外国人には「ファンタスティック」「ワンダフル」と、かなり新鮮に受けとめられるようだ。

操さんは模様だけでなく、文字も帯締めに組み込む。「夢」などの一文字から、なんと和歌まで。趣味で俳句を詠むことから、自作の句を帯締めに組み込んだ作品もある。驚くこちらをよそに「でも字を入れるのはそれほど難しくはありませんよ。一番難しいのはやっぱり無地ね」と言う。柄がない分、糸を引く加減など少しでも組み方にむらがあれば、そのまま見えてしまうからだ。シンプルなものほど職人にとっては気が抜けないというわけだ。

また、30年ほど前にご主人がはじめた基礎から教える「くみひも教室」は好評で、現在も続けている。主婦や定年退職後の男性など、生徒の年齢や環境はさまざま。これまでに数多くのくみひも師を育ててきた。「私が持っている技術を少しでも多くの方々に伝えたいと思っています。若い人がどんどんくみひもを習ってくれるとうれしいです」と操さんは語る。

京の歴史とともに千有余年、京くみひも



梶 操 かじ みさお

1928(昭和3)年京都生まれ。高等女学校卒業後、地元の小学校の教師になり、1952年、勤務先で同僚だった梶昇氏と結婚。1977年、京くみひもの伝統工芸士に認定される。



右から「耳高高麗」「夢」の字を組み込んだ帯締、ほかしが美しい「太刀紐亀甲組」。



高台に座り、左右のひもを交差させながら68玉もの糸を組んでいく梶さん。58玉や74玉もあるが、68玉がもっともきれいに仕上がると言う。



組み方の手順を記した暗号のような綾書き。現在は書ける人が少ない。



綾書きがあればさまざまな文字を組み込むことができる。



ストラップは最近のヒット商品。ほかにも名刺入れや髪飾り、マスコットなどもくみひもで作る。



昇苑くみひも
宇治市宇治妙楽146 電話0774(23)5510
<http://www.showen.co.jp/>

「能の曲目のひとつに、小野小町は100歳になっても歌を忘れなかったというストーリーがあります。私はそのような小町が大好きで、自分もそういう女性でありたいと思っています。」

微笑みながらそう語るのは、1921(大正10)年生まれ、博多人形師・井上あき子さん。能もの、美人もの、武者ものなどに分類される博多人形で、井上さんが手がけるのは主に能ものだ。最初に作った小町人形「卒塔婆小町」が1974(昭和49)年に内閣総理大臣賞を受賞。伝統工芸はもとも男性優位の世界だけに「認められて本当にうれしかったですね」と振り返る。その後も内閣総理大臣賞を2回、ほかに通産大臣賞など、六十余年の経歴のなかで数えきれないほどの栄誉を受けた。

そもそも佐賀・唐津出身の井上さんと人形との出会いは、10歳年上の博多人形師・井上長二郎氏との結婚がきっかけ。長二郎氏の作品に魅せられた井上さんは、プロポーズを受けて長二郎氏の「妻」で「弟子」になったのだ。

博多人形の制作は、粘土をこねて原型を作り、型を取ることから始められ



日本画でも使われる顔料を用い、着物の柄を描いているお弟子さん。色の基本は6色。



博多人形は型取りをして生地を起こすため、小さなパーツは体とは別に制作。手にも表情がある。

る。そこから生地を起こして成形したものを素焼きし、彩色していくという工程を踏む。当時100人ほどいた弟子のなかで女性はたった1人。与えられた仕事はひたすら絵の具をすり鉢で溶くこと。夫を陰で支える妻でもある井上さんにとって、人形作りへの道は果てしなく遠かった。

転機が訪れたのは、作り手である男

たちが出征した戦時中。井上さんは夫の型を使って人形作りを始めた。2人の子供や義父母を養うためでもあった。「私なんかで作った美人ものでもよく売れましたよ」。戦争中に人形が？と意外に思えるかもしれないが、心が荒んでいる時代だからこそ、優しく微笑む人形ものに人々は癒しを求めたのだろう。

忘れられない出来事も起こった。店に人形を買いに来た青年は海軍少尉。人形をどうするのかと尋ねると「僕のお嫁さんにしたい」と答えたそう。長二郎氏が出征前に作った最後の人形だったが、出撃が明日に決まり、この人形を抱いて行きたいという青年の心中を思うと、譲らないわけにはいかなかったという。切なくも人形の持つ力の大きさを感じるエピソードである。

能ものへの転身

井上さんが本格的に人形作りを始めたのは、戦後しばらくたった35歳のとき。長二郎氏は戦地から無事帰還したものの、病に冒され3年半の闘病を経て亡くなった。その悲しみを乗り越え

るように、自分で一から作品を作ろうと決意。夫が遺した美人もの型を使うのではなく、すっぱりと能ものへの転身をはかったのだ。

「お人形は床の間などに飾るものですから、作品の題材はハッピーエンドの曲目から選びます。顔もうつむいた時は悲しそうに、少し上げれば笑顔に。ひとつの能面で愁いや喜びを表現しなければなりません。約束事の多い能に触れるうち、その奥深さに魅せられたのです。」

それからはひたすら独学。能の舞台を見るために北海道から仙台、東京、京都、大阪まで、各地に足を運んだ。舞台だけでなく、楽屋裏まで訪ねて紐の結び方や衣紋の様子などをスケッチし、わからないことはとことん聞いた。もちろん、資料もたくさん読んだ。1991(平成3)年に内閣総理大臣賞を受賞した「薪能」も、実際に舞台を見て作り上げた作品。薪の明かりで足元が金色に輝き、袴のグレーが強い濃淡を見せている。

このように井上さんの人形作りは、惜しみない努力と細やかな観察力、そ



「草子洗小町」は若いころの小野小町の物語。この作品で3度目の内閣総理大臣賞を受賞。



武蔵国・六浦の称名寺を舞台にした「六浦」。1982年に通商産業大臣賞を受賞した。

して、今までにないものを作り出そうという独自の視点が原点になっている。そのこだわりとともに、女性がなかなか入り込めない世界だったからこそこの試行錯誤の賜物なのかもしれない。

制作過程でいちばん気をつかうのは、やはり面相仕上げ。ときには息を止めながら、髪や目など一本一本の線に命を吹き込む。あとは全身のバランス。美しい八頭身になるように仕上げるこ

とだ。着物の柄などを自分のスケッチを見ながら描くことはあっても、体の動きや重心の位置などは、驚くことにすべて頭の中で組み立てながら直接粘土で形作っていくという。

「作品を作っている間は無我夢中。無心になれるのが何より幸せ」だそう。過去の苦労話を語る口調も暗くない。現在も、全国から制作依頼が届き多忙を極めている。

これまでに4人の女性のお弟子さんを一人立ちさせ、さらに現在は息子さんやお孫さんも跡を継いで活躍中。博多人形を一家で支えている。また、イギリスや韓国で個展を開いたり各国の大使の訪問を受けるなど、その活躍は海外でも高い評価を受けている。

胴や頭、手足、そして細部と、彫りながら人形の原型を作っていく。全体のバランスをとることは人形の出来を左右する重要な工程。「仕事をしているときは無我夢中で雑念がなくなります。それが一番幸せですね」と井上さん。

素焼きに筆で命吹き込む 博多人形



井上あき子 いのうえあきこ

1921(大正10)年佐賀生まれ。唐津高等女学校卒業後、1939(昭和14)年に井上長二郎氏と結婚して博多人形の世界に入る。1979年、伝統工芸士に認定。国指定卓越技能保持者、福岡県無形文化財保持者。



美人ものの「宴」。体の重心や手足の動きなど、構図はすべて頭の中で組み立てて制作にあたっている。



工房では原型作り、型取り、彩色、面相仕上げなど、作業を弟子と分担している。右の男性が井上さんの孫で4代目の和彦さん。博多祇園山笠人形師として29歳でデビューした。

井上博多人形工房
福岡市西区今宿上ノ原748-1 電話092 806 7155
<http://www.inoue-hakatadoll.com/>

木染め、泥染め、島育ち 奄美の自然に 育て上げられる大島紬

その地方独自の植生や土質と水質、そして固有の歴史の中で生まれ、受け継がれてきたのが伝統的工芸品である。高級絹織物として知られる本場奄美大島紬も、島に自生する車輪梅（奄美の方言で「テーチ木」）と蘇鉄の里山から流れ出た谷水の泥田があって織り出される島育ちの伝統的工芸品だ。

工房としての奄美の自然

伝統的工芸品の名前には必ずといっていいほど地名が織り込まれているが、このネーミングの中に伝統的工芸品の基本的な存在様式が表現されているといってもいいだろう。

産地を問われることがなく、むしろグローバル脱産地化を理想とする工業製品と工芸品の差はそこにある。工芸品はアンチ・グローバルが基本で、その土地でしか醸し出せない「郷土色」がウリである。本場奄美大島紬といえば、烏の濡れ羽色をした深味のある黒と銀鼠色の色調に特色があるが、この色合いを出すのが「泥染め」だ。しかし、その前工



テーチ木染め。テーチ木の木片を煮出した汁に絹糸を浸し、揉みながら染めていく。



田中イサ子 たなかいさこ

1937 昭和12 年に奄美大島の船大工の家に生まれ、23歳で代々続く織屋に嫁いだ。1999 平成11 年、大島紬の図案部門で女性でただ1人の伝統工芸士に認定された。

程としてテーチ木による「木染め」があることは、意外と知られていない。

テーチ木は奄美の山野に自生する常緑の低木または小高木で、4、5月ごろに小ぶりの白い花が咲く。この木をハブに噛まれないように注意して山から切り出して、幹を小さくチップ状に碎き、釜の中で煮込み、その煮汁を使って絹糸を染める。染めて乾いたらまた染めるという作業を何回も何回も繰り返していきと赤褐色に色づいてくる。

この木染めした絹糸の束を泥田にもって行って、泥田の中で中腰になってチャッチャッと拍子をつけて揉み込むのが泥染めだ。

泥の中で揉み込むと、テーチ木の煮汁に含まれるタンニン酸と泥田に含まれる鉄分が反応して本場奄美大島紬独自の深みのある黒が発色してくる。

泥田の水は、蘇鉄が自生している谷間を縫って流れてきた水。蘇鉄は読んで字のごとく「鉄で蘇る木」だから、蘇鉄の森の中を流れてきた水には鉄分



テーチ木で染められた糸。何十回と染めては乾かす木染め作業を繰り返すうち、絹糸は赤褐色に仕上がっていく。

が含まれているのだ。

泥染めされた絹糸はきれいな川水で洗われ、再びテーチ木の煮汁で染色され、泥染めされる。

木染め、泥染めは合わせて80回ほど繰り返されるが、染色の現場を訪ねて、その工程をつぶさに見学していると、木染めの小屋と屋外の泥田、そして泥田を包み込むような木々の茂り、つま



泥染め工程。鉄分を含んだ谷間の水を貯め込んだ泥田で何十回も泥染めを繰り返すと絹糸はコクのある烏の濡れ羽色に仕上がっていく。

り奄美の自然が工房のように思われてくる。

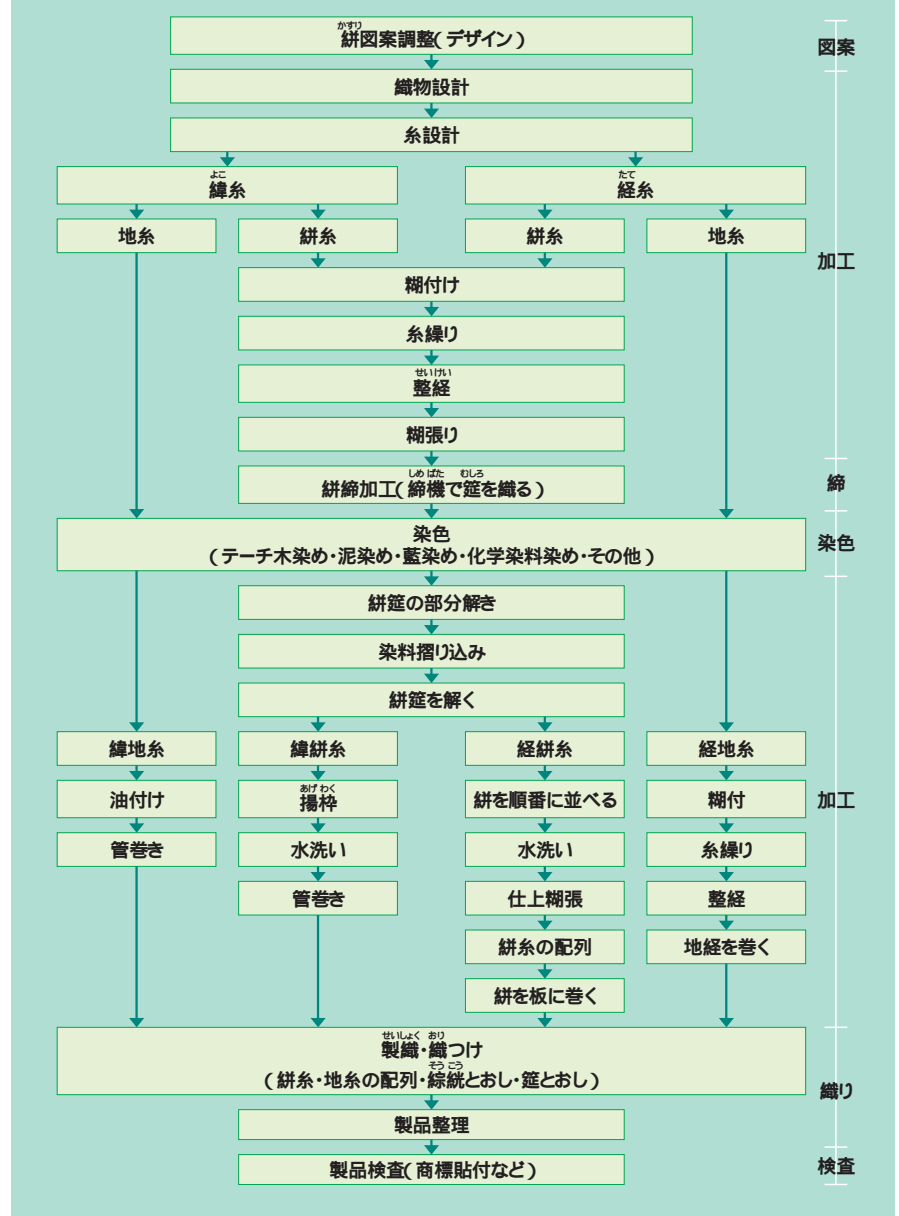
惜しみなく時間を使って

伝統的工芸品は手作りである。長い修行の末、先人の技芸を体得した匠たちによって惜しみなく時間を使って制作されていく。

一つひとつの工程を解説する余裕はないが、染色の前段階の「拵加工」については触れておかなければならない。拵とは図案(絵柄)の部分でガス糸(綿糸)で締める(括る)作業だが、ここは男仕事で、むしろ織るという。

1本の細い糸の中で図案になる部分をガス糸で括る。そのあと染色に出す。木染め、泥染めが終わると、筵の部分

●本場奄美大島紬製造工程



木染め、泥染め前のガス糸を使った拵。筵を織るともいう。他の産地は手づくりや板筵だが、本場奄美大島紬では拵機を用いる。図案に合わせて経糸で絹糸を強く締めなければならないため、男性の作業だ。

のガス糸を解く。すると、1本の糸の中に泥染めの色合いの部分とそうでない部分、つまり拵糸ができる。

拵は「飛白」とも書くが、言い得て妙だ。飛び飛びになった無色の部分に

染料をすり込むのである。拵作業も拵を解く作業も目が痛くなるような微細作業だ。そうして、タテの地糸と拵糸、ヨコの地糸と拵糸を織りなして図柄が織出されてくる。



目破りの作業。筵を解くともいう。紺縮に使ったガス糸を1本ずつ解いていって紺を露出させる。



色付工程。解かれた紺に、図案に基づいて染料を摺り込んでいく。



織工さんによる柄合わせ。紺模様を一つひとつ合わせていく、気の遠くなるような作業だ。

泥染め由来

江戸時代、奄美大島は薩摩藩に属したが、それは薩摩藩内というよりも薩摩の植民地というべきではなかったろうか。列強の植民地がゴムやコーヒーなどの換金作物の栽培を強いられたように、奄美の人たちは砂糖と紬の生産を強いられたのである。

江戸中期、享保年間の記録によると、島民に対する大島紬の着用禁止令が出されている。織り上がった布は強制的に供出させられた。大島紬は薩摩藩にとって得難い収奪特産品だったのだ。

あるとき、薩摩藩の役人が紬を集めにやってきた。そこで、村の娘は織り上がった紬を抱えて家を出て、泥田の中に隠した。村役人が去って幾日か過ぎたころ、娘は泥田の中の紬を取り出すと、木染めの赤褐色の紬が、烏の濡羽色に仕上がっていた。ここから、現在の泥染めが始まったと語り継がれている。

文明開化の明治になると着用禁止令も解け、販売も自由になり、その独特の色合いが愛好されて、本場奄美大島紬は全国ブランドになった。

ところが、太平洋戦争が終わると、奄美は占領軍の統治下に置かれ、生産禁止令が布告された。紬は贅沢品だというのである。



タテ、ヨコの紺糸を合わせて模様を織りだしていく機織り。長さ1反(3丈4尺)、幅9寸7分に使われるタテ糸は、紺糸1208本、ヨコ糸は、紺糸18,360本、地糸18,360本。

このとき、「大島紬がなくなったら島民は生きていけない」と占領軍に立ち向かって陳情を続け、投獄されたのが、当時の田中絹織物の当主、田中靖二氏とその仲間だった。

なお、奄美大島が沖縄より一足早い1953(昭和28)年に本土復帰を果たしたとき、占領軍の生産禁止令も撤廃された。

紬を守る、誇りを守る

この気骨のある紬の織屋に船大工の家に生まれたイサ子さんが嫁いできたのが1960年のことである。田中靖二氏は、彼女の義父にあたる。

イサ子さんが嫁いできた年から平成に時代が変わる、ざっと30年間は大島紬の全盛期だった。

問屋は次から次へと織屋に図案を送りつけてきた。織子たちは1反でも多く織って、本土に出て行った息子や兄弟たちに仕送りするために、朝の5時から工場に詰めかけてきた。

「私も遅くとも毎朝4時半には起きて働きました」とイサ子さんは語る。

しかし、平成になって、バブル経済が崩壊すると、売れ行きはバッタリと途絶え、問屋は「図案は出せない」と言ってきた。問屋が図案を支給しない

女性伝統工芸士を応援する町の応援団【讃の会】

現在、わが国には国が指定する207の伝統的工芸品があります。この工芸の里で長い時間をかけて受け継がれてきた匠たちの技を守る伝統工芸士はざっと4,600名。うち、女性伝統工芸士はおよそ500名です。

2002年に設立された「讃の会」はこの女性伝統工芸士の中の「グループ匠美(takumi)」のメンバー17名を応援する町の応援団です。「町の応援団」という言葉の中にはクライアント、支援者づらはしない、ましてや居



2006年9月に東京・田町の「女性と仕事の未来館」で開催された讃の会恒例の「第3回 暮らしを彩る匠の女たち展」の様子。

丈高に「あしなさい」「こうしなさい」などのさかしらなアドバイスなどもしない、という意味が含まれています。焼き物、織物、塗り物などなど、暮らしを彩るさまざまな生活工芸品を使う市民ユーザーの立場で工芸品を鑑賞し、感動し、その喜びを広く伝えたい、というのが讃の会の目的です。

伝統的工芸品の良さを広く世の中に伝えるために讃の会では、女性と仕事の未来館で「暮らしを彩る匠の女たち展」(東京・田町)を開催していますが、昨年9月に開いた「第3回 匠の女たち展」には、ざっと600名の方々がご来場となりました。そして、来場されたお客様に女性伝統工芸士のみなさんは嬉々として、自分たちが作った工芸品について説明しています。彼女たちの喜びこそ、讃の会の設立の趣旨に合うものです。

讃の会のもうひとつの活動は、産地ツアーです。これは、讃の会会員で、女性伝統工芸士の工房を訪ねるといったものです。

工芸品は歴史と風土を証人として、身元のしっかりした場所で制作された故郷の作



産地ツアーで木染めの現場を見学する讃の会の会員たち。

品です。ですから、工芸品に親しむためには、まず、工芸の里を訪ねること……。そんなコンセプトでスタートしたのが、産地ツアーです。

今回は、田中イサ子さんの本場奄美大島紬の工房を会員23名で訪ねました。

工芸の里を訪ねると、風の薫り、陽の輝きを含んだその土地の全てを素材にして工芸品は作られるのだと実感します。

なお、讃の会での活動に興味を持った方は、讃の会のウェブページをご覧ください(<http://sannokai.com/>)。

[讃の会・代表世話人 佐藤徹郎]

ということは、もう紬は売れない、生産を中止しなさいと言うに等しい。

老舗の織屋が1軒また1軒と姿を消していき、気がつくと、現在の生産量は全盛期の10分の1、織子の数も減少し、伸びたのは織子の平均年齢だけという有様だ。

イサ子さんと夫の郷二さんは何度も廃業を考えたが、「いざとなると、投獄されながらも本場奄美大島紬を守ってきた義父の姿が浮かんでくるのです」と言う。

そこで、イサ子さんたちは決断した。図案の制作や販売も含めて、自助努力で本場大島紬を守っていこうと。

1999(平成11)年、イサ子さんは本場奄美大島紬の図案部門で、女性ではた



本場奄美大島紬伝統の幾何学模様を新境地を開いたイサ子さんの図案。糸や紺が方眼紙に表現されている。



イサ子さんの工房(田中絹織物)の展示室。紬特有のシャリツとした手触りで、視線を内に誘い込むような内省的な色合いの織物だ。

だ1人伝統工芸士に認定された。2003年、イサ子さんはご主人に先立たれたが、幸い長男の広文さんが家業とイサ子さんたちの決断を継いでくれている。

イサ子さんが、もう一つ守りたいと思っているのは、大島紬の紺の原点ともいえる「一元式」の製織技法だ。

現在、本場奄美大島紬の販売展示会などに出品されているのは「カラス式」と呼ばれるもので、タテ紺糸1本、ヨコ紺糸2本のキの字型の製織だが、一元式は、タテ紺糸2本、ヨコ紺糸2本の井の字型である。タテ紺糸が1本多

い分だけより精密で織細さが求められるが、だれかが残さなければ「本物」の伝承が途絶えてしまう。イサ子さんは、その伝承者になることをめざしている。

なぜなら、そのことによって、機械化や化学製品による安易な代替品を拒み、惜しみなく時間をかけただけの美しさと安らぎを与える伝統的工芸品が仕上がってくるからである。その場所に、伝統工芸の美と誇りのアイデンティティー(存在意義)が証明されるのである。

田中絹織物
奄美市名瀬小浜町7-8 電話0997(52)0213